

ルイス・ビーベスのレトリック論における elocutioの意味とdecorumの役割

安 藤 真次郎

▶キーワード

Luis Vives
Rhetorica
Elocutio
Decorum
Prudentia

▼要 旨

ルイス・ビーベスは『学問論』(1531)の中で、古典レトリックに対する自らの見解を表明し、その後『弁論法について』(1533)において、elocutioとdecorumに重点を置いた独自のレトリック論を展開している。彼のいうelocutioとは、従来の古典レトリックに見られる文彩や転義法などの修辞技法を意味するのではなく、状況や内容に適した言語表現ということの意味する。そのために、彼は言葉や文体の性質をよく理解することを重視した。またdecorumとは、言語表現が言説のテーマ、聞き手、時、場所に合致したものであることを意味し、そうした言説を行なうようにすることこそがレトリックの真の目的であるという見方を示している。本稿は、こうしたビーベスの実践主義的なレトリック論の特徴を、主に『弁論法について』の分析を通して、elocutioとdecorumの概念を中心に考察したものである。

はじめに

ルネッサンスを代表する人文主義者ルイス・ビーベス(1492-1540)は『学問論』*De disciplinis*(1531)の中で、レトリック固有の役割はelocutioのみであるという考え方を示した¹。Elocutioとは、古典レトリックにおける五部門のうちの一つであり、「修辞＝表現法」と言うべきものである²。古典レトリックの五部門とは、「発想 inventio」「配置 dispositio」「修辞＝表現法 elocutio」「記憶 memoria」「発表 anuncio」であるが、elocutioを除いては、言語表現に直接関わる問題ではないとして、レトリックという学問の対象から除外したのである。「発想」において見出された語るべき内容や思想が「配置」において構成され、「修辞＝表現

法」においてはじめて言葉という衣装が与えられて外形が整うのである。ビーベスにとってレトリックとは言語表現を目的としたものであり、「よく話す」ための技術であった。それゆえ、*elocutio*こそがその役割を担うものであった。しかしながら、彼は、*elocutio*とはレトリックの世界で一般的に想起されるような文彩とか転義法といった細かい修辞の規則ではないとも述べている³。では、ビーベスにとって、*elocutio*とは何を意味するのであろうか。

また彼は『学問論』の中で、言葉を上手に適切に使う術であるレトリックほど実際の社会生活において役立つものはなく、「実践知の最も力強い一翼」とみなしている⁴。なぜなら、人間の精神は、「言葉の持つ小さな焰で燃え上がり、理性はその刺激を受けて動揺する」からである。それゆえに言葉は「最大の善事と最大の悪事とのいずれの源」にもなりうる。だからこそ、「人と事柄と場所と時をわきまえたふさわしい言語」を用いること、すなわちレトリック用語で*decorum*と呼ばれるものが極めて大切となってくる。では、このような*decorum*を備え、かつ、相手や状況にあったふさわしい言葉を使えるようにするためにはどうしたらよいとビーベスは考えているのだろうか。

『学問論』の中で示されたこのような*elocutio*と*decorum*の概念を中心としたビーベスのレトリック観は、『学問論』の二年後に出版された『弁論法について』*De ratione dicendi* (1533) という作品の中でより具体的に展開されている。この書は、レトリック教本として書かれ、ビーベスの言語表現論とも呼ぶことのできるものである。そしてビーベスは、『弁論法について』の序文で、「これまでのレトリック書とはまったく異なる新しいもの」だと述べている⁵。では、彼の『弁論法について』は具体的にどのような点で、新しいものだったのであろうか。

本稿では、『弁論法について』の分析を通して、ビーベスのレトリック論における*elocutio*の意味することと*decorum*の果たす役割を明らかにしていくとともに、彼自身が「まったく新しい」というレトリック論がどのようなものだったのかを考察していきたい。

1. 『弁論法について』の構成と内容について

『弁論法について』は、1533年ルーヴァンにおいて初版が発行された。しかし、ビーベスの生前は、この初版以外にバーゼル版(1536-37年)とケルン版(1537年)の二版が出版されただけである。彼の死後も、16世紀半ばと18世紀後半の全集(1555年バーゼル版、1782-90年バレンシア版)に二度収められたに過ぎない。このように、この作品は非常に出版回数が少なかったため、ビーベスの著作としても、またレトリック論の書物としても長い間注目を浴びることがほとんどなかった。しかし、1950年代に始まるレトリック復興(ニューレトリック)の流れの中で、古代ギリシア・ローマの古典レトリックやルネッサンス期のレトリックが再び注目されるようになり⁶、ビーベスの『弁論法について』も1960年代より、主にアメリカで研究されるようになってきた⁷。さらにビーベスの生誕500周年を迎えた1992年前後からは、アメリカだけでなくヨーロッパにおいてもより本格的な研究が進み⁸、近年では二つのスペイン語訳が出版されるに到っている⁹。

これまですでに何人かの研究者が指摘しているように¹⁰、『弁論法について』は伝統的な古典レトリック書のような内容構成になっておらず¹¹、理解しづらい面があることは否めない。

そのことが、出版の少なさとともに、これまで研究者たちの注目を集めることがなかった理由の一つといえよう。ではまず本書の構成と内容について概観してみたい。

『弁論法について』は全三巻から構成されており、第一巻はレトリックの素材である「言葉」の性質の考察に充てられている。前半では主に単語、節、文について外見的な視点と意味的な視点から検証され、後半では一般的なレトリック書で扱われる文彩や転義法について考察されている。

第二巻の前半は、「文体」の性質の考察に充てられ、様々なタイプの文体とその特徴を人間の心身との比較を通して検証されている。それは、古代の作家やルネッサンス期の作家たちの具体的な用例を挙げながら、理論的というよりも実践的な視点からの考察である。第二巻の後半では、「言説」¹²を行なう具体的な手順が示されている。はじめに言説の目的をはっきりさせることの重要性を説き、その次にレトリックの四つの目的である「教えること」「説得すること」「感動させること」「聞き手の関心をつなぎとめておくこと」について語られている。そして状況や聞き手に適したテーマ、内容、表現方法を選ぶということについて説明され、最後に「配置」について述べられている。

第三巻では、主に教育面で用いられる機会の多い十のジャンルの言説が取り上げられ、その特徴や執筆の注意点などが説明されている。それらは大きく二つのグループに分けられ、一つは「内容」に重点を置くジャンルで、「①描写」、「語り（②歴史・③蓋然性のある話・④寓話・⑤詩）」、「⑥学芸の規則」である。もう一つは「言葉」に重点を置くジャンルで、「⑦言い換え」、「⑧要約」、「⑨説明」、「⑩翻訳」である。

ビーベス自身が述べているように、第二巻の前半までが、主にレトリックの素材であり道具である言葉の性質に関する考察であり、それ以降は実際に言説を行なうための具体的な手引きというような構成になっている¹³。実際の目次は以下の通りである¹⁴。

序説

第一巻

1. 言語と文明、自由 Language and Civilisation, Liberty
2. レトリックの目的 Aim of Rhetoric
3. 単語の性質（メタファーを含む）Qualities of Words (includes metaphor)
4. 節と文の性質 Qualities of Phrases and Sentences
5. 音と散文の作文 Sounds and Prose Composition
6. *Copia*と簡潔さ *Copia* and Brevity
7. 完全文 Periodic Sentence
8. 修辭と文彩 Ornament and Figures

第二巻

- (序文) (Preface) / (文体と人体の比較) (Comparision between style and human body) / (アッティカ体、アジア体、ロードス体) (Attic, Asiatic and Rhodian styles) / 1. 色 Color / 2. 部分の接合と結合 *Conjunctio partium et proportio* / 3. 形 *Forma* / 4. 体格、体質 *Habitus* / 5. 神経、腕、わき腹、筋肉 *Nervi, lacerti, latera, musculi* / 6. 鋭さと才気 *Acumen et subtilitas* / 7. 学識 *Eruditio* / 8. 判断 *Judicium* / 9. 感情 *Affectus* / 10. 習慣 *Mores* / 11. 威厳 *Dignitas* / 12. 教えること *De docendo* / 13. 説得すること *De persuadendo* / 14. 感情させること *De movendis affectibus* / 15. 聞き手の関心をつなぎとめておくこと *De tenendo auditore* / 16. 適切さ *De decoro* / (イントロダクション) (Exordia) / (配置) (Disposition)

第三卷

(序文) (Preface) / 1. 描写 Descriptio / 2. 語り De narratione / 3. 歴史 De historia / 4. 蓋然性のある話 Narratio probabilis / 5. 教訓的な寓話 Apologi / 6. 淫蕩な話 Fabulae licentiosae / 7. 詩の創作 De poeticis / 8. 学術を学ぶ規則 De praeceptis artium / 9. 言い換え De paraphrasibus / 10. 要約 Epitome / 11. 説明と解説・論評・注釈 Enarrationes et commentarii / 12. 翻訳または解釈 Versiones seu interpretationes
(結論) (Conclusion)

2. ビーベスのelocutio観

このように『弁論法について』は、伝統的な古典レトリック書とは異なった構成であるが、それは『学問論』の中で示されたビーベスのレトリック観に鑑みれば理解することができよう。彼のレトリック論の根本的な思想は、社会や日常生活において、言説を通して目的を達成するために、相手、事柄、場所、時をわきまえた言葉を適切に上手に使うということにあり、決して装飾を施した絢爛たる言葉を使い、華麗で甘美な文体を作り上げることではないからである¹⁵。ビーベスは『弁論法について』の序文においても、レトリックという時に、一般に考えられるような文彩や転義法といった細かい知識ばかりを意味しないと指摘している。

一方、レトリックという学問が言葉についての考察——つまり構成、転義法、完全文、言い回しの調和など——だけだと考えているレトリック家たちは間違いを犯している。こうした要素は、表現の美化や装飾に対するほどには、言説そのもの、つまり表現の内容に対しては影響のないものである。実際、言説の色や形がレトリックに占める割合は何と低いことか！¹⁶

それゆえに、言葉の考察を行なっている第一巻と第二巻前半においても、一般のレトリック書で多くのページを占めている文彩や転義法にはあまりページが割かれておらず、それよりも、言葉の性質について理解することに多くのページが充てられている。ではここで、ビーベスの言葉と文体と言説に関する考察を具体的に見ていきたい。

2.1. 言葉の性質について

ビーベスによれば、言葉というものは、人間が魂と肉体からなっているのと同様に、意味と単語 *sensa et verba* からなっている。それ故に、言葉を理解するためには、人間の肉体にあたる言葉の外面と、人間の魂にあたる言葉の意味との両面から検証される必要がある。また言葉は、単語という単独語として、また節や文章という複合語としても検証される必要があるとしている。

言葉を外面的に考察する場合、単独語としては「時代」、「品位」、「大きさ」、「音」などの点から、複合語のレベルでは、「言葉の様相」、「継ぎ目」、「順序」、「音」、「大きさ」といった点から考察を行なう必要があるとしている。

次に言葉を意味の点から検証する場合は、単独語としても複合語としても「意味の持つ力と性質」という点から考察される必要があり、大きく「自然な表現」と「比喩的な表現」とに分けられている。「自然な表現」とは自然な語順や普通一般の表現のことで、「比喩的な表現」とは語順を入れ替えたり、あるものを別の表現で呼んだりする表現のことである。それはメタファーとか転義法と呼ばれるところのものである¹⁷。ここでビーベスは、このような「比喩的な表現」を使うのはその必要性があるときで、闇雲に意味もなく使うべきでないと指摘している。文彩や転義法といった「意図的な」表現を使うのは、まず「表現上の必要」のために、次に「その有用性」のために、そして最後に「表現を美しくする」ためであるとしている。比喩的な表現をしないと相手に伝えることのできないもの、比喩を使ったほうがより深い理解の得られる場合、そしてより豊かで美しい表現のためにこうした技法が使われるべきであって、必要以上の装飾を施した言葉を使って、意味もなく華麗で甘美な文体を作り上げるべきではないとしている。

2.2. 文体について

文体の考察においても、単語、節、文章の時と同様に、人間の心身との比較が行なわれている。まず、外面的な比較のポイントとして、「身長」、「姿かたち」、「皮膚」、「肉付き」を挙げている。「身長」に関しては、崇高で雄大な文体、低く貧弱な文体、そして平均的で平易で穏かな文体があり、崇高過ぎるものも貧弱過ぎるものもよくなく、大切なのは扱われるテーマに適した文体を選択することだと述べている。「姿かたち」については、丸く滑らかな文体と角張った硬い文体とがあり、「皮膚」については、滑らかで柔らかな文体とざらざらした文体があるとしている。「肉付き」という面から見ると、単語、言い回し、迂言法において表現が豊かな文体は肉付きがよく、押し詰められた文体は肉付きが悪く貧血気味であるとし、このような基準から見て、古代から三つの文体があると指摘している¹⁸。

ビーベスはここからさらに「色」「形」「体格・体質」「神経・腕・わき腹・筋肉」という観点より文体を考察している。文体の「色」は人間の衣服に該当し、三種類の基本的な色がある。①色のない文体、②自然な色のある文体、③化粧を施した文体である。テーマ、話し手、聞き手に即した色だと心地のよいものになる。ここから次に「形」が生まれる。それは美しい文体、エレガントな文体、愛嬌のある文体、感じよく魅力的な文体などである。続いて「体質・体格」という点からみると、健全な言葉の使われている文体、健全な判断が行なわれている言説があり、またその反対に腫れあがった不健康な文体というものがある。最後に外面的な考察の「神経、腕、わき腹、筋肉」という視点から考察される。神経がしっかりして強い筋肉をもった文体もあれば、反対に脂肪だらけで神経もなく疲れきった文体もある。

外面的な考察に続いて、内面的な考察が行なわれ、「鋭さと才気」「学識」「判断」「感情」「習慣・慣習」「品位・威厳」という点から検証されている。「鋭さと才気」という点からみれば、鋭い文体もあれば、切れ味の悪い退屈な文体もある。鋭さばかりが追求されると詭弁や屁理屈になる可能性もある。またテーマの最も奥深いところまで入り込むことができれば、才気ある文体になりうる。「判断」の点から見れば、内容のあるしっかりした言説もあれば、内容の全くない言説もある。「感情」という点から考察すれば、どういう言葉によって人間の感情

が高ぶったり鎮まったりするかを分析する必要がある。「習慣・慣習」の視点からは、少年的な文体、若者的な文体、熟年の文体、重厚な文体、享樂的でふざけた文体、そしてその中間の心地のよい文体などが挙げられる。「品位・威厳」の点からみると、都会的な文体、外国風の文体、崇高な文体、大衆的な文体、低俗な文体、下品な文体、田舎風な文体、軍隊風な文体など様々なものが挙げられる。

2.3. 言説の十のジャンルについて

ビーベスは、古典レトリックで言われていたような「三つの文体（壮重体・中庸体・単純体）」や「三つのジャンル（審議弁論・法廷弁論・演説弁論）」だけでは、ルネッサンスという時代においては不十分であると考えた。レトリックは、社会や日常生活、そして教育の場においてももっと多様な需要に対応できるものでなければならないのである。彼が第三巻において、ルネッサンス人、特にルネッサンス期の教育家が必要とした十のジャンルの言説を取り上げ、その特徴や執筆の注意点などを挙げているのはこうした理由からと考えることができよう。それらはすでに見たように、「①描写」、「語り（②歴史・③蓋然性のある話・④寓話・⑤詩）」、「⑥学芸の規則」の「内容」に重点を置くものと、「⑦言い換え」、「⑧要約」、「⑨説明」、「⑩翻訳」の「言葉」に重点を置くものである¹⁹。ビーベスは、それぞれのジャンルについて、それに見合った言葉、文体、構成など具体的な例を挙げながら詳しく説明している²⁰。

2.4. ビーベスにとってelocutioの意味すること

ビーベスは、本書の大半（第一巻と第二巻の前半、そして第三巻）を、言葉と文体と言説の細かい分析に充てているが、それは言葉を適切に扱うためには、まずその性質を知ることが必要であると考えたからといえよう。言葉こそがレトリックの素材であり道具であり、言葉を選択することこそが雄弁のスタートなのである²¹。つまり、言葉の性質をしっかりと理解した上で、適切な単語や修飾語を選択し、言説の内容に即した文体を作り上げることが「よく話す」ための方法だと考えたのである。

またこうした考察も、具体的な例を挙げながら実に実践的な方法で行なっている点が彼の特徴の一つである。それは後年彼が『靈魂生命論』*De anima et vita* (1538) において人間の魂の研究を行なった際に、形而上学的ではなく経験的実践的な方法で行なったことをわれわれに想起させるものである²²。

このように、ビーベスはelocutioを単なる文彩や転義法といった狭い点からでなく、単語の選択、文体の選択、言説の構成に到るまでの広い範囲における言葉の適切な運用として捉えたといえよう。それは、文彩や転義法を彼が軽視しているということではなく、その重要性は認めつつも、それよりももっと大きな視点から言葉と文体と言説というものを考察することの必要性を説いているということである。大切なのは、装飾を施した絢爛たる言葉を使い、華麗で甘美な文体を作り上げることではなく、状況と目的とに適した明確でわかりやすい豊かな言語表現をすることだからである。

3. Decorumの役割とは何か？

ビーベスは、『学問論』でも『弁論法について』でも、「言語」と「正義」が人間社会の絆であると述べているが、その中でも「言語」の方がより効力を持つと見なしている²³。なぜなら、「正義」は一部の教養ある者にしか理解されないが、「言語」は万人に大きな影響を及ぼすもので、人間の理性も感情も言葉によって動かされるからである。よって、言葉を上手に巧みに操ることのできる者が社会において力を発揮するのは理にかなったことである。また言語ほど人間の内面を明らかにするものではなく、社会生活におけるあらゆる場面で、「上手に効果的に話ができる」ことは思慮分別のある賢い人間の証しであり、それを我々は目指さないとはいけないと彼は考えている。

しかしながら、「上手に効果的に話す」ことは、これまで見てきたように、言葉に関する知識や能力があれば可能になるわけではない。言語能力以外に、様々な学問の知識や人生経験など多くのことが必要とされる。言説の内容は各学問の領域であり、弁論家たちが必要な知識を持っていなければならないことはもちろんだが、それはレトリックという学問が関与する領域ではないので、レトリック書において扱われる必要はないとビーベスは指摘する。彼がレトリックにおいて、*elocutio*とともに重視したのがdecorumである。ビーベスは『弁論法について』の第一巻序文において、次のように述べている。

本書の目的は「内容」でも「言葉」でもなく、「どのように表現するか」ということである。というのは、「内容」はそれぞれの学問から、あるいは人生経験や知識や生活から、つまりギリシア人がいうところの「博学*encyclopedia*」から得られるものである。一方、「言葉」は市民のものであり、どの学問も勝手に奪うことのできないものである。よって本書で追求することは「言葉」と「内容」が目的に合致したものになるようにすることである。そうした方針に則り、本書は「何を言うのか」ではなく、「どのように言うべきか」ということについて述べるものである²⁴。

ここで述べられていることは、彼のレトリック論を解く重要な鍵である。つまり、相手、事柄、場所、機会にふさわしい、適切で効果的な言説を行なうということこそが、レトリックの真の目的だとビーベスは考えているのである。このような言説の内容および言語表現がテーマ、場面・状況、聞き手に合致しているという概念をレトリック用語でdecorumという。ビーベスのレトリック論の最大の特徴と言えるのが、このdecorumの重視である²⁵。このレトリック用語は、現在まで日本語の定訳は見当たらないが、「適切さ」「ふさわしさ」ということを意味する。このdecorumという言葉は、古典ギリシア語の*prêpon*に源を持ち、キケロがそれをラテン語でdecorumと呼び、レトリックに適用しはじめたものである²⁶。

そしてビーベスは、このdecorumを司るのが*prudentia*であると指摘する。この*prudentia*とは、「思慮分別」「慎重さ」「知恵」などと訳されるものであるが、状況判断の力や他人の感情の動きを読み取る力など、「常識」に基づいた人間の総合的な力を意味するものであり、規則化することの難しいものである。いわば、年齢、経験、学問などが教える人生の知恵のよう

なものであるといえよう。ビーベスは、このprudentiaについて次のように説明している。「prudentiaの基本的でもっとも古くからの働きは、目的を見定めて、それを達成するための適切な手段を見極めるということにある。」²⁷そしてまた、decorumとprudentiaの関係について次のように述べている。

この術（レトリック）の根本的な基礎は、行ないに適切さがあるという点にある。そしてそれは教えられないものである。なぜなら、この学問特有の事柄ではなくて、人生全般におけるものだからである。それゆえにprudentiaの領域にあるのである。そのprudentiaは特定の規則にまとめられるものではなく、状況、人、場所、時を考慮に入れなければならないものなのである²⁸。

3.1. レトリックの四つの目的

Prudentia自体は教えることのできないものであるが、ビーベスはdecorumを備えた言説を行なうための具体的な指示をわれわれに示している。最初に心得ておかなければならないこととして、「言説の目的をしっかりと定めておく」ことを挙げている。そしてレトリックの目的として、「教えること」、「説得すること」、「感動させること」、「聞き手の関心をつなぎとめること」の四つを挙げ、それぞれの目的を達成するための留意点を説明している。「教える」ために最も注意を払うべきことは、理解されるようにすることであり、そのためには正確でわかりやすく中立的な言説であることが大切である。「説得する」ためには、われわれが説くことを相手に信じさせなければならないので、言説の内容は信憑性の高いものであり、話し手が信頼の置ける人物でなければならない。「感動させる」ことに必要なのは、人間の感情の動きをよく理解した上で、話し手が誰で、聞き手が誰で、テーマが何であるかを常に念頭に置いておくことである。伝統的な「喜ばせる」という目的にはあまり意味がないとビーベスは見なしている。なぜなら聞き手は悲しんだり、泣いたり、驚いたりするからで、大切なのは「聞き手の心をとらえる」ことだからである。

3.2. Decorumの五つの要素

次に考慮しなければならないこととして、「話し手」、「聞き手」、「場所」、「時」、「題材」という五つの要素を挙げ、それぞれについても詳細な説明を加えている。「話し手」について言えば、年齢、仕事または生活のスタイル、品位などについて考慮する必要がある。言説の内容や表現は、話し手の立場に合ったものでなければならないからである。青年ならば仰々しい言説は似つかわしくないし、熟年や老人であれば簡潔で穏やかな表現がふさわしい。品位についても、話者の教養、徳、力、社会的地位などについて考慮しなければならない。もしこうした点で他人よりも劣るなら、言説も他の人よりも控えめで丁寧なものでなければならないからである。「聞き手」に関しては、「話し手」についてよりもさらに注意が必要であり、言説の内容のレベルを決めるために、まず聞き手の知識や教養について考えなければならない。また聞き手の記憶力にも注意しなければならない。それによって、長い言説にするか短い言説にするか

を判断するのである。その他にも聞き手の健康状態、年齢、慣習・習慣、性格、受けてきた教育、家系、社会的立場、職業などについても考慮する必要がある。「場所」については、それが教会なのか一般社会なのか、公的な場所なのか私的な場所なのかなどについて考えなければならないし、「時、機会」についても同様の考慮が必要である。そして最後に「テーマ」については、神に関することなら威厳を持って語り、自然についてならば正確さと明瞭さを持って話さなければならない。また人間について語るならば、精神と肉体に分けて話す必要があり、体と魂の両方を扱うなら、自然について語るときと同様に語らなければならない。魂だけを扱うなら、徳を称揚し悪徳を非難するようにする必要があるとしている。

こうした五つの要素を十分に考慮した上で、プロローグやエピローグで何を言い、言説をどのような順序で構成²⁹したらよいかを考えて言説を行なえば、聞き手の注意をそらすことなく、言説の目的を達成できるであろうとしている。

3.3. エートス、ロゴス、パトス

さらにビーベスは、説得力のある言説にするためには、「話し手の信頼性（エートス）」、「論理の力（ロゴス）」、そして「聞き手の感情（パトス）」という三つの要素を考慮に入れなければならないことを強調する。聞き手を説得するためには、言説の内容を信用させる必要があるが、その信頼性は、話し手の振る舞い、性格、信用から生まれてくるのである。倫理学のテーマであるエートスの研究はレトリックの領域ではないが、話し手はエートスのある人物でなければならない。また、もし言葉を使った説明だけで聞き手を説得できない場合は、「論理の力」を使うか、あるいは「聞き手の感情」に訴える必要がある。

聴衆の関心を捉えるために、心の動きの研究を重視したことは、ビーベスのレトリック論の大きな特徴のひとつである。その成果は、人間の感情論についての画期的な書となった『靈魂生命論』³⁰にまとめられている。ビーベスの感情論の基本は、「善に対する愛」と「悪に対する憎悪」を人間の感情の主たる二つの源とみなし、その他のすべての感情はここから生まれてくるという点にある。感情とは精神のはたらきで、善か悪かでわれわれを動かすものである。人間の感情の動きを研究すること自体はレトリックの目的でも仕事でもないが、どのような言葉・言説で聞き手の感情を掻き立てたり鎮めたりできるかを考慮するのはレトリックの仕事である。なぜなら、聞き手の同意を得たり、聞き手を説得したり、感動させたりするためには、人間の感情を利用する必要があるからである。

おわりに

ビーベスは、レトリックという学問は若い学生に簡単に伝授できるものではないとしている³¹。それはこれまで見てきた通り、レトリックを学ぶ目的は、単に文彩や転義法といった技法を習得することではなく、相手、場所、時に適した文体や内容で言説を行なうことだからである。そのためには、さまざまな学問の知識や豊富な人生経験など、言語的な知識・能力以外のことが要求されるのである。聞き手を説得するためには、話し手としての信頼性や論理の力が必要であるし、聞き手の気持ちを動かすためには人間の感情の動きについての知識が必要だ

からである。「上手に効果的に話す」ことを目的とするレトリックは、人間としての総合的な力であるprudentiaが要求される学問なのである。彼が自分のレトリック論をこれまでのものとは「まったく異なる新しいもの」だと述べている理由はこうした点にあるといえよう。つまり、それまでの伝統的な古典レトリック教本が、文彩や転義法といった修辞技法、あるいは三つの文体や三つのジャンルといった狭い範囲に焦点をあてていたのに対し、『弁論法について』は、言説の対象を実生活で必要とされる十のジャンルに拡大し、より実践的なレトリック論を目指したからである³²。そのためにビーベスは、elocutioを「言葉と文体の適切な運用」という広い範囲のものと捉え、言説を行なう際にはdecorumという概念の必要性を強調したのである。

〔付記〕 本稿は、龍谷大学2003年度長期海外留学制度を利用した研究成果の一つである。

注

- 1 ビーベスの古典レトリックに対する見解、及びその背景などについては、拙論「ルイス・ビーベスの『学問論』に見られる古典レトリック観について」『イスパニア図書』7 (2004), pp.15-26を参照。古典レトリックに対する彼の見解は主に次の三点に集約することができる。①三種類の弁論（「審議弁論」「法廷弁論」「演示弁論」）の否定、②五部門（「発想」「配置」「修辞＝表現法」「記憶」「発表」）の否定、③三つの文体（「壮重体」「中庸体」「単純体」）の否定である。
- 2 レトリック用語は、日本語でまだ定訳のないものが多いのが現状である。本稿では、日本語の定訳のない用語については簡単な説明を加えた上で、ラテン語のまま使用することとする。
- 3 J. L. Vives: *Del arte de hablar*, intr., ed. y trad. de J. M. Rodríguez Peregrina (Granada, Universidad de Granada, 2000), p. 6. (以後同書はDRDという略称を使用する。)
- 4 J. L. Vives: *Las disciplinas*, trad. y notas de I. Roca Meliá et al (Valencia, Ajuntament de València, 1997), t. II, p.170. (以後同書はDisという略称を使用する。) この『学問論』の第二部「学問伝授論」は、小林博英氏による邦訳が存在する。ヴィーヴェス『ルネッサンスの教育論』（明治図書、1964年）、p. 173.
- 5 DRD, p. 6.
- 6 ルネッサンス期のレトリック研究については、J. J. Murphy (ed.): *Renaissance Eloquence. Studies in the Theory and Practice of Renaissance Rhetoric* (Berkeley, University of California Press, 1983)を参照。またスペインのルネッサンス期のレトリック研究については次の三点が詳しい。A. Martí: *La perspectiva retórica española en el Siglo de Oro* (Madrid, Gredos, 1972); J. Rico Verdú: *La retórica española en los siglos XVI y XVII* (Madrid, C.S.I.C., 1973); L. López Grigera: *La retórica en la España del Siglo de Oro. Teoría y práctica* (Salamanca, Universidad de Salamanca, 1994).
- 7 この時期の注目すべき研究としては、次のようなものが挙げられる。J. F. Cooney: *De Ratione Dicendi, A Treatise on Rhetoric by Juan Luis Vives* (Tesis, Ohio State University, 1967); M. J. Thomas: *The Rhetoric of Juan Luis Vives* (Tesis, Pennsylvania State University, 1967); I. G. González: *Juan Luis Vives. His Contributions to Rhetoric and Communication in the Sixteenth Century with a translation of 'De Consultatione'* (Tesis, Indiana University, 1973); E. Coseriu: "Acerca de la teoría del lenguaje de Juan Luis Vives", *Tradición y novedad en la ciencia del lenguaje* (Madrid, Gredos, 1977), pp. 62-85.
- 8 本格的なビーベスのレトリック論研究としては、次のようなものを挙げることができる。D. P. Abbott: "Juan Luis Vives. Tradition and Innovation in Renaissance Rhetoric", *Central States Speech Journal*, 37 (1986), pp. 193-203; E. V. George: "Rhetoric in Vives", en Mestre, A. (coord.): *Ioannis Lodovici Vivis Valentini Opera omnia*, I (Valencia, Alfons el Magnànim, 1992), pp. 113-177; E. Hidalgo-Serna: "La elocución y *El arte retórica* de Juan Luis Vives", en Vives, J. L.: *El arte retórica* (Barcelona, Anthropos, 1998), pp. VII-XLIX; T. Albaladejo Mayordomo: "Retórica y *elocutio*, Juan Luis Vives", *Edad de Oro*, XIX (2000), pp. 9-28; J.

- M. Rodríguez Peregrina: "Introducción", en Vives, J. L.: *Del arte de hablar* (Granada, Universidad de Granada, 2000), pp. XIII-CXLVI; P. Mack: "Vives' *De ratione dicendi*: Structure, Innovations, Problems", *Rhetorica*, 23-1 (Winter, 2005), pp. 65-92.
- 9 スペイン語訳は次の二版がある。*El arte retórica*, ed., trad. y notas de A. I. Camacho y estudio introductorio de E. Hidalgo-Serna (Barcelona, Anthropos, 1998); *Del arte de hablar*, intr., ed. y trad. de J. M. Rodríguez Peregrina (Granada, Universidad de Granada, 2000). 特にロドリゲス・ベレグリーナによるものは、現在最も信頼できる校訂版であり、本稿執筆にあたっては、この版を主に利用した。
 - 10 こうした指摘は、E. V. George, *op.cit.*, p. 154や、J. M. Rodríguez Peregrina, *op. cit.*, pp. 76-77やP. Mack, *op. cit.*, p.66などに見られる。
 - 11 例えば、1553年に出版された英語で書かれた最初の総合的なレトリック書であるトマス・ウィルソンの『修辞学の技法』(九州大学出版会、2002年)と比べてみれば、その違いは明らかであろう。
 - 12 ラテン語のOratioのことで、スペイン語でDiscursoと訳されているものである。中村雄二郎氏は、フーコーの『知の考古学』の翻訳に際して「ディスクールDiscours」の訳語を最も苦心し、最終的に「言説」を採用したと述べている。その理由として『「ディスクール」には、「言」という要素と「説」という要素が不可分なものとして存在していること』としている。筆者も中村氏の見解に同意し、「言説」という訳語が最も適当であると考え。フーコー『言語表現の秩序』(河出書房新社、1995年)pp. 85-86を参照。
 - 13 DRD, p. 79.
 - 14 この目次の作成にあたっては、マックによって作成された目次をベースとした。第一巻及び英語の表記の部分は、マックによりつけられた見出しであり、ラテン語の部分はビーベスの原著に見られるものである。Cf. P. Mack, *op. cit.*, pp.67-68.
 - 15 拙論『前掲書』p.22を参照。
 - 16 DRD, pp.5-6.
 - 17 この「比喩的な表現」についてビーベスは、意味の変化の方向によって三つに分類している。一つは換称 antonomasiaなどのように「大きなものを小さくする」こと。二つ目は代換法 hipalage や換喩 metonimia のように「小さなものを大きくする」こと。そして三つ目は直喩 *simil* o *semejanza* などのような「類似性を見出す」ものである。
 - 18 ここでいう三つの文体とは、①正確で純粋なアティッカ体、②中間的なロードス体、③言い回しの多いアジア体を指している。
 - 19 当時の主要なジャンルとして「書簡」というものが挙げられるが、本書では扱われていない。この分野については、『書簡の書き方について』*De conscribendis epistolis* という本が、『弁論法について』の出版された翌年の1534年に上梓されている。
 - 20 ビーベスによれば、「内容」についての言説は、「動かないもの」と「動いているもの」とがあり、「動かないもの」を語るのが「描写」で、「動いているもの」を語るのは「語り」である。「語り」は、「①教える・説明する」ためのもの、「②説得する」ためのもの、「③楽しませる」ためのものなどがあり、①の場合は「真実性」が、②の場合は「蓋然性」が、③の場合は「楽しみ」が必要となるとしている。「学芸を学ぶ規則」については、説明は常にわかりやすく正確であるべきで、内容のわかりやすさを言葉の選択の基準にすることが大切だとしている。「言葉」に関する言説の中では、特に「翻訳」について詳しい説明を加えている。「翻訳」は、「意味だけに忠実なもの」、「文体に気をつかうもの」、「意味にも文体にも注意を払うもの」の三つの種類を挙げている。原文の真意に留意しながら、言語を知らなかったゆえに、また内容を知らなかったがゆえに間違いを犯すことがないようにと戒めている。そして「翻訳」はある程度自由なものだと認めながらも、原文からあまり離れたものにしないようにするとともに、オリジナル版に負けないような立派なものにすることが大切であると述べている。
 - 21 DRD, p.10.
 - 22 『靈魂生命論』については、拙論 "El alma humana en Juan Luis Vives", *Hispanica*, 41 (1997), pp. 139-156. を参照。

- 23 *Dis*, t. I, p. 199; DRD, p. 3.
- 24 DRD, p. 10.
- 25 ビーベスは、言説におけるこのdecorumの大切さについて序論の中でも触れているし、また第二巻でも多くのページを割いている。マックはビーベスがレトリック論においてdecorumを本格的に扱った近代最初の作家であると指摘している。Mack, *op. cit.*, p. 84.
- 26 Cicero, *Orator*, 70. Cicerón, *El orador*, trad. intr. y notas de E. Sánchez Salor (Madrid, Alianza, 1991), p. 58.
- 27 DRD, P. 79.
- 28 DRD, p.100.
- 29 『学問論』の中でビーベスはレトリックの構成要素として「配置」を除外しているが、ここではdecorumという視点から行なわれていると見るのが適当であろう。
- 30 この書物によって、ディルタイはビーベスを「近代心理学の祖」と見なしている。
- 31 DRD, pp. 4-5.
- 32 DRD, p.9.